

# なぶらプロジェクト最終便報告書

## 岩手県上閉伊郡大槌町災害ボランティア活動

平成26年4月18日（金）～20日（日）



主催：特定非営利活動法人御前崎災害支援ネットワーク

《ご協力いただいた皆様》

遠野市上鱒沢集会所の皆様、佐々木亮様、三陸ふじのくに絆ハウス名倉様（静岡県ボランティア協会）、梅津武弘（UR 都市機構）様、(株)雄樹園様、(有)東海プランテーション様、(株)野川商店様、(株)清水工業様、(株)木村鋳造所様、タクミ建設(株)様、(株)松下工務店様、(株)植田組様、東海清風園様、灯光園様、(株)常盤様、栗山製麩所様、ながしま茶園様、赤堀良春様、田古正孝様、鈴木一郎様、梅津純子様、原田雅代様、三巻由紀子様、山田優実様、鈴木毅様、太田しづ江様、河田広美様、長尾衛様、東町公民館様、その他の皆様 ご協力ありがとうございました。

## 「なぶらプロジェクト」最終便の報告書

平成26年4月18日(金)午後7時に参加者25人は御前崎市役所前を出発しました。今回が9回目となる大槌町ボランティア活動ですが、団体で行くのはこれが最後となります。翌19日(土)午前5時半頃予定通り岩手県遠野市宮守町の上鱒沢集会場所に到着しました。

ここ遠野市は東日本大震災当初から後方支援拠点として自衛隊など様々な支援に協力してきました。静岡県や静岡県ボランティア協会と共に私たちネットワークも拠点地として協力をいただきました。とても寒い地域でこの日の朝は4月というのに氷点下3度ととっても寒かったです。

この集会場は震災の年3回宿泊場所として提供をしていただき当時は皆寝袋ですが畳の上で寝ることができとても助かりました。集会所の館長さんをはじめとする数人が前回同様私たちのためにササニシキのご飯を炊いて待っていてくださいました。今回が最後となるため感謝状と記念品などを贈呈してお別れしました。

本当にありがたい「おもてなし」でした。



続いて遠野市にある株式会社 YDK という企業さんに立ち寄りました。ここも震災直後2回自ら被災しているにもかかわらず宿泊場所として提供いただき差し入れなどしてくださいました。被災した建物も修復が済み今は順調に回復したと部長さんは安堵されていました。感謝状と記念品を贈呈して大槌へ向かいました。

今回の大槌町でのボランティア活動はおおつち保育園の花壇づくりです。塩害にあった土を建設関係の参加者にバックホーで掘り起してもらい、新しい土をみんなでネコで運び入れました。かなりの重労働となりましたが、誰も文句も言わず一生懸命取り組んでいただきました。

幅1, 6M長さ50Mと細長い花壇です。

花の数は全部で1300株もあるため事前に準備された配置図を見ながらみんなで





一株ずつ季節の花が植えられました。芝桜などの多年草を中心に風車を加えた賑やかな花壇の完成です



花壇づくりを終え応急仮設団地の訪問をしました。今まで続いているお手紙ボランティアの相手の家にみんなで手分けをして訪問し傾聴活動をしました。訪問する中だいたい「調整中」と張り紙のある空き家が増えてはいましたがまだまだたくさんの皆さんが生活していました。帰り際には別れを惜しみ手を握り締め離さない方や行くことを知っていてバナナケーキを作って待っていてくれる人もありました。仮設団地内にある岩間商店店主は3年たったらまた来てください。「きっと変わっているはずだから」と自分に言い聞かせるように話をしてくださいました。いつまでこの生活が続くのかいまだ先は見えない状況のようでした。



次に大槌北小学校の跡地に建てられた「大槌福幸きらり商店街」へ行き買い物をしてきました。いつものさんまのみりんの干しやさけ最中の店を回ると来たことをとても喜んでくださいました。ここでも「3年たったら変わっていると思うからまた来てくださいね」と言われました。(きれいな朝日、食事中)

前回と同様の吉里吉里にある民宿タカマスに向かいました。津波で破壊されて営業ができなかったホテルが再開しプレハブでできたコンビニもあり少しずつだけ復興の兆しが見えてきていました。この夜は当時と違い賑やかにワイワイと夕食を楽しむことができました。

翌朝、早起きした参加者が撮ってくれた吉里吉里の朝日です。きれいですね～。

あの津波が嘘のようですね・・・。

20日（日）朝8時出発し、今までは仮処分場となっていて見る事ができなかった

「しょっこりひょうたん島」を見学しました。きれいに補修され赤い小さな灯台が印象的でした。栈橋もできて赤浜海岸から島に渡ることもできます。大槌町はお昼12時に「ひょっこりひょうたん島」のテーマソングが流れます。



右上の写真は旧大槌町役場前です。当時余震続きこの建物の前にテントを張り対策本部を立てました。町長をはじめとする課長クラスの職員が津波の犠牲になり行政機能は麻痺してしまいました。現在は仮の慰霊所が設置されていますが役場の建物は一部を残して解体することになっています。

旧大槌町役場より山側の様子（右写真）です。大槌駅周辺で本来ならば商店や住宅が立ち並ぶ賑やかな場所だったのです。現在はかさ上げのための造成工事中です。復興計画では水産加工などの工場などは建てることができますが、住宅や商店などは建てることはできないそうです。役場の仮庁舎は津波と火災による被害のあった大槌小学校舎と校庭です。



仮の消防署と警察署などの公共施設が集まっています。

続いて釜石市鶴住居地区の慰霊堂と隣接している復興絆ハウス（静岡県ボラン



ティア協会)に行きました。鶺住居は「釜石の軌跡」と「釜石の悲劇」と呼ばれるように日頃の訓練の結果が両極端に表れた場所です。釜石東中学校は群馬大学院の片田敏孝教授の教えでハザードマップを信用せず大きな地震の後は大きな津波を警戒してすぐ高台へ逃げる訓練をしていました。



一方、いつも低地にある鶺住居防災センターで「津波の時は高台に」と言いながら防災訓練をしていた近隣の役200人は津波にのまれてしまいました。私たちはこの教訓をしっかり受け止め南海トラフ巨大地震や様々な災害に備えなければなりません。

災害ボランティアという活動から知りえたことは数知れません。当初がれき(あえてがれきと記す)に埋もれた街を見た時の衝撃、人や物すべてを奪われた人々の心のダメージ、全国から集まってきているボランティアの多さ、仮設団地の嘆き、少しずつきれいになってくるがれきの街、一生懸命必死で商売を再開する人たちの強い心、復興住宅へ移りまたコミュニケーションづくりに悩む人たちなど私たちのなぶらプロジェクトはたくさんを知ることができました。そして、多くの人たちに参加をしていただき、お金や物のご支援ご協力を賜りなぶらプロジェクトの成功につながりました。本当に皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。 なぶらプロジェクト代表 落合美恵子

#### 参加者アンケートより

- 復興にはまだまだほど遠いと感じた。現地の声を聞いてやれることをやる。
- 地域の多くの人に東北の現状を見てもらい訓練の大切さを知ってほしい。
- 大槌の人が「忘れられることが一番怖い」と言っていた「なぶら復興支援号」をぜひ出してほしい。
- 津波発生、高いところへという考えは友人にも伝え自分自身もしっかり守る。
- きりり福幸商店街にお客様がほとんどいなかった地元だけでは復興は難しい。
- 2年前の大槌とはかなり違ってたけど寂しさ、わびしさは似ていました。あのような姿を見るとこれからも何かなくてはと思う。
- 救援活動は被災者のためと思っていたが私自身の人間性回復の行為だった。